



Title	樺太からの引揚者と戦後北海道 [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	木村, 由美
Citation	北海道大学. 博士(文学) 甲第15992号
Issue Date	2024-03-25
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/92376">http://hdl.handle.net/2115/92376</a>
Rights(URL)	<a href="https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/">https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/</a>
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	Yumi_Kimura_review.pdf (審査の要旨)



[Instructions for use](#)

# 学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名：木村 由美

	主査	教授	白木沢 旭児
審査委員	副査	教授	川口 暁弘
	副査	教授	小田 博志

## 学位論文題名

樺太からの引揚者と戦後北海道

### ・当該研究領域における本論文の研究成果

本論文の研究成果としては、第一に、外務省外交史料館所蔵「密航脱出一覧」を初めて分析して、樺太からの脱出を果たした 1 万 3605 人分の出発地、上陸地、職業、船の概要など基本的事実を明らかにしたことである。その結果、樺太南部の海岸に近い地域から、まとまった人数が脱出していたこと、船は漁船に限らずさまざまな大きさの船が用いられていること、職業も漁業者に限らず多様であったことなどが明らかにされた。

第二に、国立公文書館所蔵『引揚者在外事実調査票』を分析して、引揚者の 1956 年時点における状態を明らかにするとともに、引揚者が 3 つの引揚げ方法のいずれによっているのか、北海道に上陸してから、職業に就き定着するまでいかなる足跡を残したのか、などを詳細に明らかにしたことである。『引揚者在外事実調査票』は、満洲、中国、南洋群島など当時の日本帝国を構成した各地域からの引揚者に対する悉皆調査の結果を記録した個票であり、膨大な数の分厚い簿冊として保管されている。これに研究者が着目して分析に着手したのは最近のことであり、南洋群島からの引揚者と樺太からの引揚者（申請者による研究）について分析が進められているのが現状である。個人情報も多く含む一次史料であるため公開は「要審査」扱いで、閲覧許可がおりるまで待つことも余儀なくされる。これを粘り強く継続して、深海村・大泊町・恵須取町・豊原市という 4 市町村計 6983 人分（各市町村とも全数ではなく部分）の『調査票』を収集・分析した功績は大きいといえよう。

第三に、申請者は以前から樺太引揚者を直接訪ねてインタビューを行ってきており、本論文にもそれが随所に生かされたことである。たとえば函館の引揚援護局の集計では「無縁故者」が圧倒的に多いとされるが、引揚者当人は、たとえ親戚など縁故があっても頼りたくない、という心境だったことなど公文書の背後にある人々の意識も汲み取っている。

第四に、戦後、札幌市・旭川市が、引揚者の受入政策を樹立し、『札幌市事務報告』等の公文書においてその実績が記録されていることに着目し、これらを活用して、戦後の都市化の過程を明らかにしたことである。手記・回想では、戦後の闇市、マーケッ

トなどが引揚者の苦勞話として取り上げられるが、公文書を活用することによって、市が用意した住宅についても事実経過が明らかにされた。また、このような作業を通じて、戦後史が引揚者を組み込んで書かれなければならない、ということも十分に示すことができた。

・学位授与に関する委員会の所見

口頭試問では、本論文の成果が確認されるとともに、いくつかの疑問点も出された。第一に、引揚げの3つの方法のうちの一つである「脱出」について、「密航」の語を用いなかった理由として引揚者の意向によるものとだけ述べていることである。聞き取り調査を行ってきた申請者が体験者の意向に配慮することは正しい態度であるが、他方では密航船という語を申請者も用いている。朝鮮半島と九州の間にも密航がさかんに行われており、当該期の日本列島を取り巻く人流の重要な手段であったと思われる。これを何と称するべきか、歴史用語としての吟味は必要であろう。第二に、このことと関連して、第二次世界大戦後に世界中で起きていた人の移動（追放、送還、難民、引揚者など）のなかで、樺太からの引揚げをどのように位置づけるのか、という問題である。申請者は、樺太における実証研究を進めた後の課題であると答えたが歴史用語の妥当性の問題を考えるならば、分析を進めるためにも知見が必要であろう。

口頭試問の結果、今後の課題についても申請者が明確に自覚していることも理解できた。本論文が明らかにした実証的成果は、他地域を対象として研究している研究者に先駆的な分析方法を示すものであり、本論文が帝国史研究・植民地研究・戦後史研究にとって、重要な貢献となることは間違いない。

以上の審査内容を踏まえて、本審査委員会は、全員一致して申請者・木村由美氏に博士（文学）の学位を授与することが妥当であるとの結論に達した。